

一
條
の
光
耕
治
人

皆 美 社



一條の光 著者 耕 治人

発行 昭和四十五年二月十五日 発行者 関口弥重吉
発行所 皆美社 東京都千代田区神田神保町二ノ二十一
電話 東京二六四―三九〇五 振替 東京一四八〇二二
印刷 中央精版印刷 製本 関山製本 定価 八〇〇円

前　書　き

私は昨年気が狂った。医者は私を松沢病院に入れようとした。家内が昔から知っているお方（女性）が、私のようなものは、松沢に入れたら正気でこの世に戻れないかもしれないといわれ、他の病院（綜合病院）に入った。私はもちろんこんなことは知らない。退院してから聞いた。

今年に入り友人から、自費出版をすすめられた。今後どんなことが起きるかわからないが、ともかく命拾いしたから、出したいと思った。

私は一昨年「懐胎」を出したが、そのとき当然収めねばならない作品が、もれていると友人から言われた。しかしその頃すでに頭がおかしかったので、自分ではわからなかった。その必要を感じなかった。

今度友人から、こんな作があったではないかといわれ、心にとめ探した。このことは正氣に戻った証拠になると思う。

そして「魯鈍(ろどん)な男」「別れ話」「明け方の客」などみつけた。友人は、その系統の作をまとめ、登場人物の名前、場所、職業など統一したら、短篇ではあるが、長篇小説としても受取ることが出来ると言った。私はその忠告に従った。ほんとうに有難かった。

私が狂った原因は十年ばかり前にさかのぼるが、そのあいだ、波があった。何かの理由で、いつときの平静が訪れることがあった。頭がおかしいといってもチョットおかしいので、人は普通の人間として扱ってくれるし、自分でも正気だと思っていた。このことが実は恐ろしいのであるが――。血なまぐさい戦場で、不意にいつときの平静が訪れることがあるそうだ。「風呂桶」は絶えざる不安、恐怖のあいだ訪れたいつときの平静が生んだといえると思う。

私は自分の症状をたどることが出来るが私が発狂しなかったら、そのまま過ごしたかもしれない。十年前の原因は形を変え、私に最後の打撃を与えるため、想像を越えた陰險な手段でやってきた。私が狂わないのがむしろ不思議であろう。

茶碗と皿は見えるが、茶碗と皿の間になにかがある。コップと自分のあいだにもなにかがある。あらゆる物と自分のあいだをなにかが隔てている。払いのけたいが、それが出来ない。それからたえずなにか聞こえる。つまり幻覚だ。それから逃れようと自分はもがいた。そのヤルセなさ、苦しさのため自殺をはかる人があるそうだが、私も例外でなかった。私は大戦中留置

場で苦しんだが、ここ十年あまりの苦しさはそれ以上だった。

私は病院で少しづつ記憶をとり戻した。発狂するということは過去を失うことだと思う。正気に戻るということは自分の過去をとり戻すことだと思う。この取り戻した過去は、発狂する前と同じ過去ではあるが、違った色彩を帯びている。このことは大切なことだと思う。

八篇のうち一番早いのは「魯鈍な男」である。最初取りかかったのは昭和十九年頃と思う。材料がむずかしいので、長くかかった。

「一條の光」は八篇のなかで最近作である。退院してから書いた。私はもう作品は書けないと思っていた。そこへ「この道」から、書くようにいつてきた。私は漠然とした気持でペンをとった。二週間ばかりで書きあげた。もしこれを書いていなかったら、自費出版をすすめられても、その気になれなかったらうと思う。

題字は長年師事してきた武者小路先生にお願いした。私がはじめて先生をお訪ねしたのは大正十一年頃だった。

井伏鱒二氏にお願いしたのは、私が氏の古い読者の一人だからである。氏の御作を読み続け、長い年月が経った。氏には本文にはさんである御文章をいただいた。

解説を本多秋五氏にお願いした。自費出版だからお願い出来たと自分では思っている。

装幀してくださった武者小路小絵氏、扉カットの赤坂三好氏に感謝する。

刊行までいろんなお方のお世話になった。特に印刷所その他のことで芳賀章氏、野口七之輔氏の配慮をいただいたことを感謝したい。一九六八年一〇月

再版について

自費出版の、限定本は、五百部だったので、なくなり、折角の好意あるお求めに対し申し訳なく思っていた。

この度思いがけなく読売文学賞をいただくことになり、これを機会に、「皆美社」から、再版させて貰うことになった。装いを別にして出版することになったわけだ。

「皆美社」は、「一條の光」を発表した「この道」と深い関係があり、再版を出すのにふさわしいと思い、感激に耐えない。一九七〇年一月二八日

目次

前書き

魯鈍な男

別れ話

明け方の客

監房

指紋

一

三

五

七

二

どくだみ

一五

風呂桶

一五

一條の光

二〇

解説

本多 秋五

魯鈍な男

何ということであろうか。溺れるものは鰻をもつかむというが、神尾本良氏を訪ねることを考えるようになったのだ。神尾氏と会わなくなつてから三年あまり、今更のこの出掛けて行ける義理ではなかった。しかし私達は、大家から立退きを喰^{おほ}つていた。路地の突当りの右手の家に、私達は住んでいたのであるが、大家は、私達の家と、むね続きの隣家をこわし、大家の住いを建てるというのであった。半年前に私達は移るようによい渡され、隣家は、大家の江古田にある持家に、移つて行つた。私達は越す先のあてもなく、愚図愚図していると、大家は、同じ軒並びの、いまの家に、取敢ず越して呉れといったのであった。すでにこわし屋が入つて、私達がそれまで住んでいた家の屋根ははがれ、壁は、打ち抜かれていた。そのほこりが、私達の、いまの住いまで、落ちて来るのであった。こわし屋の仕事の模様を見に来るのか、それとも、私達を、立退かせる催促に来るのか、毛糸の腹巻をした、頭のはげ上つた大家は、一日おきくらいにやつて来た。そして、

「どうかね。家はあつたかね」

ということがあつた。取りこわしがすむと、早速新築にかかるということだが、いずれは、いま私達が住んでいる家も、こわし庭にするという。大家はここから十五分ばかり行つた東中野駅前、蕎麦屋で、私達は、家賃がたまつていたので、強いことはいえなかった。

神尾家は、永福町にある。代田橋駅をおりて、二十分位あるくのだ。夏輝会の、搬入は、四日後に迫っていた。いま神尾家に行き、「僕も、今度は、夏輝会に出品しますよ」といえば、神尾氏は何と云うだろう。私は神尾家で暮したことがあるのだ。神尾氏は、審査の時、私の絵に、注意して呉れるかもしれないと思う。そんなことはあり得ない。審査は厳正で、実力がなければ、入選しないのだ。それは私もよく知っていた。だから、私が勤めを止め、油絵をやり出してからも、神尾氏のところに行かなかった。自分で、自分の道を、切開いて行くつもりであった。蓄えはなくなり、家内は、勤めに出るようになった。しかし私は自信はあったのだ。だから、今度大家から移された私達の家と、むね続きになっている隣家の、区役所の吏員が、「お互に、頑張りましょうぜ。裁判になれば、わし達が勝ちますからな。わしには弁護士の人もあるから、大いに、家主と、やり合いましょう」

と、朝出掛けに、私の家の玄関により、けしかけるようにいって行くが、私は入選さえすれば、絵は売れるだろうから、不義理もすまし、新しい家を見付けて、越して行くつもりであった。大家は今までたまっている家賃は棒引きにする、引越料も出すといっているが、新しく借りる家の、敷金も、私達には、ないのであった。私の絵が入選し、展覧会場に飾られ、新聞に出れば、今まで私に冷い目を向けていた親戚も、手の裏を返したようになり、絵も売れるに違

いないのだ。「もう暫くの辛抱だよ。入選すれば、お前の着物も買ってやるし、鏡台も、買つてやるよ」私は、家内によく言った。度々の引越して、家内が私と一緒に住った時持つて来た鏡台は、こわれていた。「ほんとうに、そうなるよ、うれしいわ」家内は、言っていた。

それ程自信がある筈なのに、恥じもなく神尾氏を訪ねることを思いついたのは、どう言うわけであろうか。長い間無沙汰していて、突然展覧会の搬入前に、神尾家を訪ねれば、私は今度夏輝会に、出します、よろしく願いますということになるようだ。私は神尾氏が、依怙鼻負をする人でないことを、よく知っていた。しかし私に対する好意も知っていた。だから三年も無沙汰していて、突然訪ねるようなことが出来るのだ。訪ねなかったのは、むしろ神尾氏の好意を、信じ過ぎてゐるからかも知れなかった。しかし私が神尾家に居た時は学生であつたが、いまは家内もある。

しかし今は暮しが立つた、立たぬかの瀬戸際だ。もし落ちたら、どう言うことになるか。私は恥じも、卑屈さも忘れたのであつた。

神尾家に近づく、胸は、高鳴り、足は浮き、三年の年月は、吹っ飛び、私が神尾家に居た時のような気持に、返るのであつた。夫人は、私を、玄関わきの、客間に通した。椽側の向うに、芝生が見えた。それは髪の毛のように、のびていた。その芝生は、私が暑い夏の日、植え

たのであった。その時私は十九だった。それから、三年、私はいま私が坐っている客間で、暮したのだ。思い出が、胸をしめつけた。

夫人が、お茶と、菓子と、持ってきた。

「いま女中が、お使いに行ってるもんで」夫人は、私の来訪の目的を、知るわけもなく、私が、その部屋で、暮していた時と、少しも変らなかった。

「なにぼんやりしていらっしゃるの。奥さんは、お元氣。いまあなたなにしていらっしゃるの」

夫人は、邪氣なく尋ねた。私ははじめ絵描きになるつもりで、知り合いの、神尾家に、居たのであった。それが志望を変更し、ある学校に入ると、卒業し、勤めてしまった。その頃は、神尾家を出ていたが、月に二三度、訪ねないことはなかった。振り出しに戻るつもりで、三年前絵をやりはじめてからは、流石に来れなかったのだ。

「いま絵を、やっていますよ」

私は自分の愚かさで、身がすくむ思いである。

「そう」夫人は、真顔になった。

「絵をやっているの」

夫人は、何かの機会で、私が絵をやっていることは知っていたに違いないと思われたがそう言った切りだった。

「これ陶善堂の、最中よ。知っていらっしゃる。あなたが、ここにいらした時に、大好きで、よく食べたのよ。ずい分来なかったから、あなた、忘れたでしょう。だけど、あたしは忘れないうわ」

夫人は、急に笑い声を立てた。夫人は、皮肉を言っているのではなかったが、私はよこしみたいな思いと、思い出のため、瀬戸の皿の、最中が、陶善堂のものとは、気がつかなかった。その最中を出して呉れた夫人の気持も、察することが出来なかった。陶善堂は、代田橋駅近くにある古い菓子屋で、最中は評判だった。堕ちた身に、夫人の言葉は、しみ渡り私は蘇った思いで、最中を手に取り、

「先生は」

と聞くと、夫人はすぐ「旅行よ」と言った。私は思い掛けなかったので、ぽかんとし、「旅行ですか。夏輝会の搬入前じゃないですか」

展覧会を前にして、旅行などしている神尾氏を責めるように言うと、「だから、旅行じゃないの。福地に行っていますわ。写生旅行よ。知ってるじゃないの」